
戦争と記憶と機械人形

風の民

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦争と記憶と機械人形

【Nコード】

N4843H

【作者名】

風の民

【あらすじ】

世界とテロリストの戦争その戦いに参加する少年少女達そして、機械人形と記憶すべてが繋がるときこの世界に何かが起こる

01 出撃（前書き）

完結まで時間がかかると思いますがよろしくお願いします。

俺は今、ハワイから日本に向けて太平洋を渡る小型空母艦「海豚」に乗っている。

その中のカタパルトにある戦闘機「SY 2」が俺が任された機体だ。

コイツは、1人乗りだった「SY 1」を2人乗りに改良した機体で機動性も向上されている。

俺は幼なじみとコイツに乗り空を飛ぶ予定だ。

今、世界では世界規模でテロリストとの戦争が起こっている。

普通のテロリストならすぐに肅清されるが今回は未知の人型兵器を保有しているらしい。

今、確認されているだけでも2種類で数は200以上いる。

テロリストはすでにアジア以外を制圧した。

俺らは科学技術の高い日本に向かいそこで防衛戦をする事になった。

これが俺たちの置かれた状況だ。

そんなことを考えているとサイレンがなった。

「艦内の乗組員に通達。前方より『海王』^{ネプチューン}と『燕』^{スワロウ}が接近中。ただ

いまより第1級戦闘準備に入れ。また、出撃可能な機体は出撃して

ほしい」

俺はカタパルトに向かって走った。

「遅いよ。アーチ」

「悪いな。ルイン」

俺は幼なじみに声をかけてコックピッドに乗り込んだ。

ルインは黄色の紙の色で瞳は青い。

美人だと幼なじみの俺でも思う。

機能を立ち上げる。

パラメーターに目を走らせる。

異常なし。

「こちらアーチ。出撃可能」

そう言うと機体が出撃用発射位置に固定された。

『You have control OK?』

「I have control. Let's go.」

俺は一気にレバーを引いた。

加速する。

光が広がる。

目が慣れてくるとそこには白い雲と青い海が広がっていた。

「前方に熱源。1機はスワロウ。もう一つは形状からネプチューンだと思う。99%ネプチューンよ」

「了解」

後ろに返答しさらに加速する。

スワロウとすれ違う。

俺は機体を返し後ろにつく。

次の瞬間、スワロウは一気に切り返してきた。

それをいなし機銃を撃つ。

弾はコックピットのパイロットに吸い込まれるように当たった。

そして、スワロウは近くの小さな島に突き刺さった。

俺はそれを見届け、ネプチューンを探した。

「下から高エネルギー反応。回避不能」

「くそ！」

直撃はまのがれたがエンジン部分をやられた。

爆発しなかったのは良かったが戦闘はできそうもない。

俺は機体用パラシュートを開き近くの島に降りた。

そこで後ろを向くと頭から血を流しピクリとも動かないルインがいた。

「おい、ルイン大丈夫か！」

返事はない。

俺はルインをコックピッドからだし砂浜に寝かした。

止血はしたが意識は戻らない。

俺はルインに何度も呼びかけた。
すると、後ろから声が聞こえた。

「その子を助けたかったら島の中心に向かいなさい」
俺は銃を抜き振り返った。

「誰だ！」

そこにはそこには白い短髪の少女がいた。

黒い瞳がまっすぐコツチに向けられている。

「私はパーサー。スワロウの補助パイロットよ」

パーサーと言った少女はそういつて島の中心を指差した。

「お前はネプチューンのパイロットに救難信号を出しこの島ごと俺達を殺そうって考えか？」

俺がそう言っているとパーサーは、

「ネプチューンのパイロットはすでに取り込まれたわ」

と言った。

「取り込まれたって？」

俺が質問する。

「オリジナルの機体には適合した人以外が乗ると高い確率で取り込まれ暴走するのよ」

「オリジナルなるとはなんだ！あれはネプチューンじゃないのか！」
俺が怒鳴る。

「あれもネプチューンよ。オリジナルのだから1%他のネプチューンと違うのよ」

「すまなかった。怒鳴ったりしてそれならお前はとうするんだ？」

俺が聞く。

「あなた達がいなくなった後私は自分を撃つだけよ。だから、早く行きなさい」

「分かった…」

俺はパーサーに一瞬で近づきみぞおちに拳を入れる。

意識を失い倒れるパーサーを俺は担ぎ、ルインを背負ってパーサーが指差した方に歩いた。

01 出撃（後書き）

感想を頂けたら幸いです。

02 起動（前書き）

機械人形のネプチューンについての説明です。ネプチューンは足から水を汲み上げ中にあるタービンを回しエネルギーを造り出します。それを使い圧縮して撃ち出したり、細くして長時間撃ち出せるようになっていきます。エネルギーが自分で造れるので水のある所なら半永久的に起動し続けることが可能になっていて、水の中を泳ぐことが出来る唯一の人型と言えます。

02 起動

俺はパーサーが指差した方向に走った。
そして島の中心部にそれがあつた。

2つ目の機械人形。

腕があり、足もある。

背中には剣が収められていた。

俺はコイツを知っている。

遠い昔に…孤児院に入る前から知っていた。

俺の産まれてから孤児院に入った日までの記憶が鮮明に思い出される。

あの時、俺は

『もうすぐ完成だ!』

科学者らしい人間が喜んでいる。

俺はそれを培養液の中から見ていた。

科学者らしい人間がコツチに向かつてくる。

『さあ、見せてくれ。世界が壊れ新たな世界ができる瞬間を…変革を私に見せてくれ』

科学者らしい人間はそう言って部屋から出て行った。

しばらくたつた頃、また別の人間が入ってきた。

『こんなの考えてる奴の頭は壊れてる』

そう言つてパソコンに手をかけた。素早くキーをたたき、エンターを押す。

するとカプセルの中の培養液が流れ始めた。

そして、カプセルが開いた。

俺は動けなかつた。

しかし、隣のカプセルの女の子と顔があつた。

女の子も動けなかったようだ。

『あなた達だけでもここから出してあげる』
そう言っただけから入ってきた人間は俺と女の子を抱え走り始めた。
そして、しばらく俺は気を失った。
次に目覚めた時は孤児院にいた。

俺は昔の記憶が戻ってくるのを感じた。

そして、機械人形が反応した。

胸の部分が開き座るところが見える。

俺はすぐに乗り込んだ。

中は広く3人乗れる広さがあった。

俺は椅子に座り機械人形を起動させた。

胸のハッチが閉まり周りが外を映し出している。

目の前にはネプチューンが砲身を向けていた。

俺は機体を横に移動させる。

さっきまでいた所を圧縮エネルギーが通過していった。

俺はコイツの名前と使い方が解る。

「行くぞ！アーチ！」

機体が反応した。

さらに昔の記憶が戻ってくる。

科学者らしい人間がいる。

パソコンに向かいながら笑っていた。

『コイツ等はオリジナルを動かすための人形だ。そのためには感情
なんていらぬ。私達の言うことに忠実に従えばいいのだから』
俺はその様子を培養液の中から見ている

そうか、コイツが俺と同じ名前なのは俺はコイツのために造られた存在だからか。

俺はひとりで納得していた。

目の前に閃光が広がる。

圧縮エネルギーが目前まで接近していた。

俺は剣を背中から抜き前に振り下ろす。

すると、圧縮エネルギーが2つに割れた。

そして、後ろで爆発する。

続けて剣を前に構え突きの態勢をとり、一気にペダルを踏み込んだ。機体は加速する。

次の瞬間、ネプチューンは胴体を貫かれ崩れ落ちた。

しばらくして爆発。

ネプチューンを倒せたらしい。

海豚に向かい光通信を送る。

すると、着艦許可の返答が返ってきた。

俺は、海豚にコイツを着艦させ、すぐにルインを医務室に連れて行ってもらった。

海豚のドックには人がいなくなっていた。

俺は部屋までパーサーを運びベットに寝かしロッカールームに向かった。

しばらく時間が経ち艦長室内。

「今回は御苦労だった。しかし、あの機械人形はどうしたのかね？」
艦長が聞いてくる。

「あの島で会った少女に導かれ手に入れました」
俺は答える。

「その少女とは先ほど君が部屋に運んでいた子かね？」
さらに艦長が聞いてくる。

「はい。彼女がいなければルイン軍曹も死んでいました」
さらに俺は答える。

「わかった。御苦労。彼女の乗船を許可する。ただし、部屋はルイ

ン軍曹と同じ部屋とする。分かったら出て行きなさい」

艦長はそうゆうと出て行くように手で指示した。

俺は敬礼をし部屋を出た。

廊下に出るとルインがいた。

「怪我は大丈夫なのか？」

俺はルインに訪ねた。

「怪我なんてなかったと言われた。それより、あの子は何？私の見間違いじゃなければ彼女はスワロウに乗ってた奴じゃないかしら？」

問い詰められた。

「そうだ。でも、今日からは俺の仲間だ。だから、パーサーと同じ部屋で寝てくれ」

俺が話をまとめて言うと、

「わかったわよ」

と返ってきた。

こうして、俺達は日本に直行するのだった。

02 起動（後書き）

前書きでは機体についての説明していることと思います。感想を心よりお待ちしております。

03 詮索(前書き)

今回はオリジナルについて少しかじってみたいと思います。

ネプチューンとの戦いから数日経ち、今は日本にいる。科学技術が高く、世界の情報が今ではここに集まるようになってる。

そして、解ったことがある。

今まで俺たちとは違う所では、アラスカでは『百獣』ライオンが想定以上の戦闘力により、アラスカを制圧したらしい。

アラスカにはライオンに対して造られた『狩人』ハンターが敗北したらしい。ライオンは機動性に優れたため装甲が薄い、短期決戦ようで1対1なら有利に戦える。

それを1対複数にするためにハンターは造られた。

大量量産機であるハンターは1対1では力を発揮できない。

それ以前に一機では無力に等しい。

だが、アラスカを落としたのはたった一機だ。

99%同じと最後の音声通信に入っていた。

俺はこれを見て理解できた。

テロリストはこれから日本に来ると。

日本は科学技術と機体量産と情報の最後の砦だからだ。

ここでの戦いが世界を左右することになると俺は考えていた。

そうした場合、俺はどうすればいいんだろうか？

戦うのか戦わないのか？

戦うとして何のために？

そんなことを考えていると後ろから声をかけられた。

「あのー……アーチさんですか？」

後ろには黒髪で長めのポニーテールの少女が立っていた。

「君は確かフィルさんだったっけ。なんか用？」

フィルさんに俺は訪ねた。

「はい。日本支部長から呼び出しです。ルインちゃんとアーチさん

を呼んでくるように言われました。」

「解った。すぐに向かう」

ファイルにそう言い支部長の部屋に向かった。

支部長室

「よくきてくれたね。アーチ君。ルイン君。君たちに機体を調整してもらおうと思ったがアーチ君には機体があるからルイン君で良いかね？」

支部長はそう言って写真を見せた。

1枚目。そこには、青がメインの機体が写っていた。

1つ目の機体で腰の両方にマシンガンをつけ脹ら脛の所に予備のマガジン。腰の後ろには2本の短剣がついている。

2枚目。黒と白が基本になっていて、兜鎧に似た角が付き、腰には刀がついている。

「ルイン君には青の機体に乗ってもらいたい。名前は『襲撃^{ライド}』と言う。どうかね？」

支部長はそう言ってルインに訪ねた。

「解りました。有り難く乗らせてもらいます。」

そして、ルインを退出させ、俺と支部長だけになった。

「アーチ君。もう1つの機体はファイルに乗せようと思う。そこで頼みがある。ファイルを守ってやってくれ。」

支部長はそう言って言葉を続けた。

「もし、約束してくれるならオリジナルと制御装置について教えよう。」

俺は悩んだ。

ファイルを守りきる自信はない。しかし、目の前に自分が何のために造られたのか知るチャンスが転がっている。

「尽力を尽くします」

「君に私が書いたノートをあげるよ。解読が必要だがな。」

「ありがとうございます。失礼します。」

そうやって俺は部屋に向かった。
そのノートにはオリジナルと制御装置について書かれていた。

『オリジナルとは古の頃からあった機体でそれは神として崇められており生贄を捧げることによりあらゆる災いを祓うとされていた。しかしある日、地が割れ、高波が来て文明を滅ぼした。これは伝承になっている。』

それから今より20年前、機体が発見された。
採掘中に1人の若者が機体に乗った。

そして、消えた。

私たちはその機体を研究所に運び、研究に明け暮れた。

そして、その機体は生贄を求めていることに気づき、生まれたばかりの子供の体や人の細胞からクローンを造り調整を続けた。

そして完成した制御装置。それは造られた人だ。

私たちは彼らをリミッターズと呼び、あらゆる機体に対応できるようにした。

108体のリミッターズを造ることになったがそれから2年が経ち研究員の1人がN0,99とN0,100を連れ出し行方をくらました。

それから1ヶ月後、私はN0,107を連れプログラムを破壊し機械や資材も破壊して逃げ出した。

私はこの子にフィルと名付け私の娘として育てるところに誓う』

こう書かれていた。

これでは、最後まで研究が続いていたのか分からないがほぼ最後まで終了していたらしい。

そして、結局はすべてがわからなかったが1つ心に決めた。

俺はこのことを知るまで戦い続けると……

03 詮索（後書き）

このような質問がきました。「ネプチューンのタービンでそこまでエネルギーが作れるのか」この質問は自分も考えていました。一応、原動機を動かすときの呼び水みたいなのを使い起動させ水を高速循環させることによりタービンを回すと水を汲み上げるをし続けます。タービンは早く回転するのでそのエネルギーで動いていると考えてください。原動機がわからない人は魚を飼うときの水槽の上に取り付けるやつをイメージしてください。最後に、細部まで設定が考えられていなく、曖昧な部分がありますがそれは未来の科学の力だと考えていてほしいです。この質問をしてくれたヴァールさんありがとうございました。感想・質問待ってます。これからもよろしく

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4843h/>

戦争と記憶と機械人形

2010年10月21日21時56分発行